ブラジルのシンクレティクな宗教世界
――アフロ・ブラジリアン宗教の成立と変容――

丸 山 浩 明

Ⅰ　はじめに

ブラジルでは、先住民であるインディオ、奴隷として渡来したアフリカ人、植民者であるヨーロッパ人やアジア人が、その文化形成に深く関わってきた。その結果、ブラジルは世界を代表する多民族・多文化国家の一つとなった。そこでは、世界各地から伝来したさまざまな民族文化が接触・混交して新たな文化が創造され、豊かで多様な文化的風土が醸成されてきた。その特徴は、ブラジルの宗教世界にも認められる。

ブラジルはかつてポルトガルの植民地であったことから、一般にカトリック大国のイメージが強い。実際、統計上の信者数からみても、世界最大のカトリック教国といえる。ブラジル地理統計院（IBGE）の 2000 年の宗教統計[1)] では、ローマ・カトリックの信者は全人口の 73.6％にあたる 1 億 2,498 万人である。これにプロテスタントの 2,617 万人（全人口の 15.4％）を合わせると、その数は国民全体の約 9 割にも達する[2)]。

一方、キリスト教以外で信者が多いのは、スピリティズム（spiritism、心霊術）に属する心霊派とウンバンダ・カンドンブレである[3)]。心霊派は、19 世紀中頃にフランス人のアラン・カーデック（Alan Kardec）[4)] が体系化し、19 世紀末頃よりブラジルの白人知識層を中心に受容が拡がった、霊の進化主義を教義の基本とする正統的カルデシズムの教派である。

科学的・哲学的な色彩が強いことから、アルト・エスピリティズモ（alto espiritismo）とも呼ばれ、医者や軍の高官などにも信者を有する、ブラジルでもっとも影響力をもったスピリティズムである。

これに対し、カンドンブレはアフロ・ブラジリアン・カルト（Afro-Brazilian cults）と総称される教派の一つである。アフリカ人奴隷がもたらした憑霊宗教の伝統に、カトリシズムの強制、過酷な奴隷生活、出自の異なるアフリカ人奴隷の共生、奴隷制廃止後の社会変化などの影響が加わって、時空間的にさまざまな変化を余儀なくされてきた。また、1920年代にリオデジャネイロで成立したとされるウンバンダは、アフロ・ブラジリアン・カルトにカルデシズムやインディオのシャーマニズムを組み合わせてつくり出された、まさにブラジル生まれの新しい憑霊宗教である。1950年代に急速に信者を増やし、その後もあらゆる人種・階層から積極的に信者を集めて、今では国民宗教と呼ばれるほど都市部を中心に全国的に拡散している。カンドンブレやウンバンダは、心霊派に対してバイショ・エスピリティズモ（baixo espiritismo）と呼ばれる[5)]。IBGEの宗教統計によると、2000年の両者の信者数は、心霊派が全人口の1.3％、ウンバンダ・カンドンブレが全人口の0.3％で、ともにカトリック教徒に比べてきわめて少数である。

しかし、人類学者ワグレーが「大多数のブラジル人は、強い信仰というよりは伝統によってカトリックである」というように、IBGEの宗教統計が示すこの数字は、ブラジルの宗教世界の現実を的確に表現しているとはいえない。すなわち、実際にはカトリック信者でありながら、同時にカルデシズムやウンバンダ、カンドンブレといった宗教に、積極的あるいは消極的に関与している人々がたくさん存在するからである。このようなカトリック信者は、一般にエスピリタ・カトリコ（espírita católico）と呼ばれ、日常的にウンバンダやマクンバなどのバイショ・エスピリティズモの儀礼に参加している。

ちなみに、エスピリタ・カトリコは、1975年には全信者数の14.7％にあたる1,613万人であった。また、実際に何らかの形でスピリティズムの組織的活動に参加しているカトリック信者は、この数字をはるかに上回り、全信者数の約30％にあたる3,300万人に達する。さらに、カトリック信者の大多数に相当する6,000万人以上が、スピリティズムの教えを信じているといわれる[6)]。

このように、カトリックが強制された植民地時代以降現在に至るまで、ブラジルではカトリシズムのヴェールの下で、インディオ、アフリカ人、ヨーロッパ人などがもたらした憑霊宗教の伝統が、さまざまに変貌を遂げつつ力強く存続し、同時に新しい宗教をつくり上げてきたといえる。換言すれば、多様な文化的伝統を担う人々の邂逅が生みだした、カトリック大国に収斂しえない宗教的多様性、とりわけ憑霊宗教の豊かな伝統こそが、ブラジル宗教世界の特筆すべき特徴である。

そこで本稿は、ブラジルの宗教的多様性の根底にある伝統的なアフロ・ブラジリアン宗教に注目し、その代表的カルトであるカンドンブレ（バイア州）やシャンゴ（ペルナンブコ州）を事例に、そのシンクレティックな宗教世界の実態を、さまざまな神霊に対する教義や信仰、儀礼などの宗教実践に着目して実証的に解明することを目的とする。

II　大西洋奴隷貿易とアフロ・ブラジリアン宗教

黒人奴隷制は新大陸で始まったものではない。15世紀末までにヨーロッパ人は近代的な大西洋奴隷貿易を確立しており、その経済的利益に最初に注目したポルトガル人は、アゾレス諸島やマデイラ諸島で砂糖プランテーションの労働力としてアフリカ人奴隷を使用していた。また、1502年にはすでに新大陸の植民地に向けて西アフリカから黒人奴隷の輸送を始めていたといわれ、砂糖プランテーションの労働力として歴史上最大規模の強

制的な移住が進められた[7)]。

この悪名高き大西洋奴隷貿易は、ポルトガル人に続き、フランス人、イギリス人、オランダ人、スウェーデン人などが次々と加わって大規模化し、アフリカ大陸の沿岸には奴隷の交易所となる各国の城砦が次々と建設され、その中心となったギニア湾の黄金海岸には、300 マイルの海岸線にエルミナ城（1482 年にポルトガル人が建設）やケープ・コースト城（1653 年にスウェーデン人が建設）など、50 以上の城砦が建てられたという[8)]。

こうして 15–19 世紀にかけてアフリカから新大陸に「輸入」された黒人奴隷の総数は約 1,000 万人と推定される。その地域的内訳は、約 36%がブラジル、約 42%がカリブ海地方（約 25%が大アンティール諸島、約 17%が小アンティール諸島）、約 5.6%がギアナ地方、約 5.5%がスペイン領南アメリカ、約 4.5%がイギリス領北アメリカ、約 2.3%が中部アメリカで、砂糖プランテーションが隆盛をきわめたブラジル、カリブ海地方、ギアナ地方の 3 地域で全体の 83.6%を受け入れたことがわかる[9)]。

新大陸で黒人奴隷がもっとも多く輸入されたブラジルでは、ポルトガル人による植民開始以来、約 360 万人[10)] の黒人奴隷がアフリカ各地から強制移住させられ、ブラジル沿岸域で発展した砂糖やタバコのプランテーション労働力として売却された。ブラジルの黒人奴隷貿易は、1）新大陸の中でもとくに早期に始まり、奴隷制が終わる 19 世紀の終わり[11)] まで約 400 年間の長期にわたり存続した、2）大量の黒人奴隷が、奴隷制時代の終焉まで間断なく輸入され続けた結果、大量の混血者が生み出された、3）アフリカ側の奴隷送出地域が時代とともに変化したため、ブラジルに定住した奴隷の出身地や彼らがもたらした民族的伝統も時代的・地域的にきわめて多様である、4）黒人奴隷の輸入は 18 世紀以降、とりわけ奴隷制時代の後期にあたる 18 世紀後半から 19 世紀にかけて集中的に増加した、などの特徴を備えている。

そのため、アフロ・ブラジリアン宗教の多様性を検証するためには、ブラジルに移植されたアフリカの多様な民族的伝統を時代的・地域的に復元する精緻な作業が有効である。しかし、実際にはそれを統計や古文書などの史料から詳細に実証することは難しい。なぜなら、黒人奴隷の出身地分類がきわめて大雑把であったうえに、奴隷制の廃止にあたり過去の恥ずべき記録類が各地で焼却処分されてしまったからである。こうした史料的制約の中で、ブラジルに「輸入」された黒人奴隷の出自に関しては、大きく「スーダン系」「バントゥー系」の2系統からなることがわかっている（表1）。

このうち、「スーダン系」はギニア湾沿岸を中心とする西アフリカの出身者たちで、イスラム化されていないヨルバ（ナゴ）、ダホメイ（ジェジェ）、ミイナなどの民族（nação）と、イスラム化されたハウサ[12]、マンディンガ（マンデ）、ペウル（フウラ）、タパなどの民族から構成され

表1　ブラジルにおけるおもな黒人奴隷の系統別にみた民族集団と主要な定住地

系統	スーダン系		バントゥー系
	イスラム教の非影響圏	イスラム教の影響圏[1]	
民族集団	① ヨルバ（ナゴ） ［ナイジェリア南部］ ②ダホメイ（ジェジェ） ［ダホメイ－ベニン］ ③ミイナ ［黄金海岸－ガーナ］	④ハウサ ［ナイジェリア北部］ ⑤マンディンガ（マンデ） ［ニジェール］ ⑥ペウル（フウラ） ［セネガル］ ⑦タパ ［ザリア－ナイジェリア］	⑧コンゴ（カビンダ） ［コンゴ］ ⑨アンゴラ ［アンゴラ］ ⑩モザンビーク ［モザンビーク］
主要な定住地	①～②：バイア州 ③：マラニョン，バイア・リオデジャネイロ州	④～⑦：バイア州	⑧：リオデジャネイロ・サンパウロ・セアラ・パラ・ペルナンブコ州 ⑨～⑩：リオデジャネイロ州

1）イスラム教の影響を受けたスーダン系は、ギニア・スーダン系とも呼ばれる。
民族集団名の前につけた①～⑩の各番号は、図1の地図内の同番号に対応する。
民族集団名の下の［　］内には，各民族集団の主要な分布地域・国を示した。
（FUNDAJ の資料をもとに作成）

る。一方「バントゥー系」は、赤道以南のおもに中央アフリカの出身者であり、コンゴ（カビンダ）、アンゴラ、モザンビークなどの民族からなる。

図 1 は、こうしたさまざまな民族の出身地と新大陸への奴隷貿易ルートを示したものである。奴隷の多くは戦争捕虜で、彼らはヨーロッパ人が海岸沿いに建設した交易のための城砦に集められ、買付人による身体検査、売買交渉、購入後の焼き印作業などを経た後、奴隷船の船倉にすし詰めにされて大西洋横断の長旅に出た。6–16 週間にわたる航海中に、天然痘や赤痢などの伝染病、自殺、暴力的反乱などにより多数の黒人奴隷が命を落としたという[13)]。辛うじて海を渡った奴隷たちは、新大陸の交易拠点であった主要な港から上陸して、奴隷市場で売買された後、各自プランテーションに移送された。ブラジルでは、奴隷市場が設置されていたサルバドール、レシフェ、サンルイス、リオデジャネイロの 4 都市が黒人奴隷の交易拠点であった。

このうち、ブラジルにおける黒人奴隷貿易の一大拠点であったサルバドールには、1550 年にアフリカ人到着の最初の記録があるという[14)]。当時の報告書が「ギニアからの黒人たち（Negroes from Guinea）」と呼ぶ奴隷の多くは、当時ポルトガル人が航行していたセネガンビア（現在のセネガルとガンビア）からコンゴ王国に至るギニア湾沿岸の西アフリカに分布する「スーダン系」の民族であり、彼らがブラジルへ送られた最初の黒人奴隷である。

しかし、17 世紀を迎えるとポルトガル人に対する主要な奴隷供給地はアンゴラに代わり、その後 18 世紀中頃までバイア州に向けて「輸出」されるアフリカ人奴隷は「バントゥー系」の民族が中心となった。実際には、彼らは数百にもおよぶ民族であったにもかかわらず、コンゴ人、アンゴラ人、カビンダ人、ベンゲラ人といったきわめて不明確な名称で一まとめにされ、中部アフリカのカビンダ（Cabinda）、ルアンダ（Luanda）、ベンゲラ（Benguela）の港や、東アフリカのケリマネ（Quelimane）、ザン

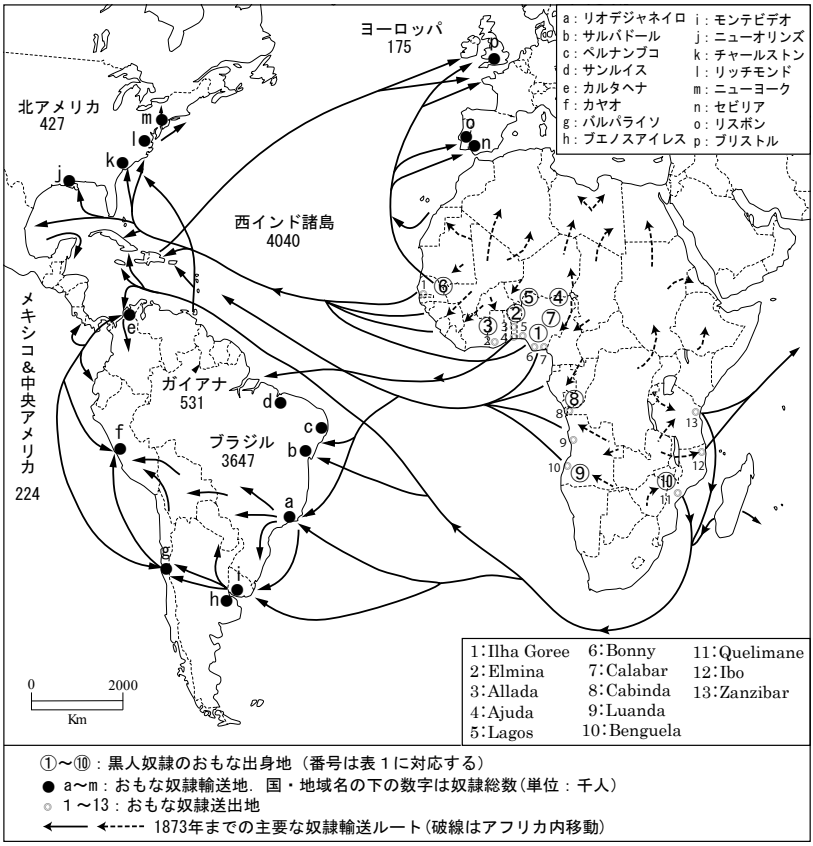

図１　ブラジルに渡った黒人奴隷のおもな出身地と輸送ルート
（FUNDAJ 資料，Joseph E. H. 1990. The African Diaspora Map. をもとに筆者作成）

ジバル（Zanzibar）の港より奴隷船に載せられてブラジルへと「輸出」された[15]（図 1）。

その後、ポルトガル人による奴隷貿易の独占が崩れると、アフリカをレコンカーヴォ (Recôncavo, バイア州のトードス・オス・サントス湾を取り囲む土壌の肥沃地帯) で生産されるタバコの有望な販売市場とみなすバイアの貿易商人らが、ギニア湾岸における奴隷貿易の支配権を掌握するようになった。そして、奴隷数が急増する 18 世紀後半からは、それまで

のアンゴラにかわり西アフリカのミイナ海岸（Mina Coast）やベニン湾から輸出される黒人奴隷が中心となった。彼らは「スーダン系」に属するジェジェまたはダホメイ、ミイナ、ナゴ、タパ、ハウサなどの民族であった[16)]。

このように、詳しい統計的な実証は困難であるが、ブラジルにはアフリカのさまざまな地域からさまざまな民族が、顕著な時代的変化を示しながら奴隷として「輸入」されたことは明らかである。そのため、受入地であるブラジルにおいても、時代的・地域的に黒人奴隷の出身地構成には顕著な偏りがあったと推察される。さらに、その後の奴隷の移動や転売なども、地域差はあるものの、出身地が異なる奴隷たちの共生を促した。その結果、アフリカ各地のさまざまな民族がもたらす多様な文化的伝統の混在が、宗教世界においてもアフロ・ブラジリアン・カルトの多様性をもたらす重要な要因となった。

さらに、ポルトガルの植民地であったブラジルでは、奴隷に対してもカトリックへの改宗が強要された結果、アフリカ各地の民族的伝統に強く影響されたカトリシズムが創成された。それは奴隷自らが望んだ異質な宗教の接触・混交ではなかった。とくに当初は、アフリカの民族的伝統を、強要されたカトリシズムのもとで存続させるための偽装的意図が強かったと考えられる。それが奴隷制廃止にともなう大きな社会変革の中で、より能動的にカトリシズムやその他の宗教までをも教義に取り込んだ混淆宗教的なものに姿を変えていった。アフロ・ブラジリアン・カルトに関する学術的関心が初めて喚起されるのも、奴隷制が廃止されて帝政から共和制に移行してからのことで、そこでは解放奴隷となった黒人がブラジル社会に市民として統合できるか否かが重要な関心事であった。

しかし、こうして始まったアフロ・ブラジリアン宗教の研究は、そのシンクレティックで多様な宗教の文化変容や存続様式の実態に迫るというよりは、むしろアフリカの伝統をより忠実かつ純粋な形で残している一部

のカルト、すなわちバイア州サルバドールを中心に存続するヨルバ系カンドンブレのみに正統性や優越性を付与し、本格的な学術研究に値するものとみなした[17)]。その一方で、アフリカの伝統を忠実かつ純粋に継承しないシンクレティックなカルトは、真正性を欠いたカンドンブレの稚拙な模倣に過ぎず研究に値しないものとみなされた。一般に「ナゴ帝国主義（Imperialismo Nagô）」と呼ばれる傾向である[18)]。

このような宗教研究の顕著な偏向は、宗教学者や人類学者らの批判にさらされてきた。すなわち、アフリカ（とくにヨルバ系）宗教の真正性や純粋性を前提として「正統」な宗教、あるいは「本質的」な宗教のあり方を想定するこの傾向は、その多様な変形、諸宗教の混在、新たな宗教の創造といった現実に進行している宗教現象を、「正統ではない」「本来の姿から逸脱した」「稚拙で劣等な」ものとステレオタイプ化し、隠蔽された支配関係[19)] のもとで葬り去ってしまう問題を孕んでいた。しかも、「正統ではない」ものとして等閑視されてきたカルトこそが、実際には地域的にも数量的にも多数派を占めており、それらを研究の射程に入れることなくアフロ・ブラジリアン宗教の全体像に迫ることはできないのである。

こうした中、近年ブラジルの宗教研究で注目を集めているのが、「非正統」「非伝統」のウンバンダである。このブラジル生まれの宗教は、アフロ・ブラジリアン・カルト、ヨーロッパ伝来の心霊術（とくにカルデシズム）、インディオのシャーマニズムなどが組み合わされて作られた新しい憑霊宗教で、さまざまな人種・社会階層から積極的に信者を集めながら都市部を中心に急速に拡大している。日本でも出稼ぎで来日した日系人を中心に活動が行われているという[20)]。

このようなブラジル宗教研究の動向の中で、一般に広義のアフロ・ブラジリアン・カルトは、「カンドンブレ・ナゴ・モデル」「ウンバンダ・モデル」の２つに分けて認識されている。しかし、実存するさまざまなカルトが果たしてこの２つのモデルに収斂されるかは疑問である。なぜなら、

古谷（1986）が指摘するように、ブラジルでは各地域で各カルト・グループがかなり独立的・自律的に活動をしており、その過程でさまざまな「ブラジル生まれの憑依霊（クリオール霊）」が生みだされ、あるいは見いだされてきたが、上述した 2 つのモデルはいまだその多くを視野の外に置いたままで標準化されにくいからである。仮に一般性があるように見えても、現実の宗教的多様性を充分に捕捉できなければそのモデルは相対化されねばならず、さらにブラジル各地のカルト・グループを対象とした実証研究の蓄積が必要不可欠となる[21)]。

本稿では、カンドンブレ（バイア州）やシャンゴ（ペルナンブコ州）の名称で呼ばれているノルデステ（Nordeste, ブラジル北東部）の伝統的なアフロ・ブラジリアン宗教を対象に、そこで祀られる代表的な神霊について概説したうえで（第Ⅲ章）、ペルナンブコ州レシフェの具体的なカルト・グループにおける宗教実践の観察を通じて、伝統的なアフロ・ブラジリアン宗教のウンバンダ化の実態を考察する（第Ⅳ章）。

Ⅲ 「伝統的」アフロ・ブラジリアン宗教の神霊

アフリカからブラジルにもたらされた信仰・儀礼や神話体系などは、黒人奴隷の出身地、換言すれば民族ごとに多様であった。たとえば、スーダン系ヨルバ族の最高神はオリシャラ（Orixala）であるが、バントゥー系の最高神はザンビ（Zambi）であった。また、同じスーダン系でも、ヨルバ族の神霊はオリシャ（Orixa）だが、ジェジェ族の神霊はブードゥー（Vodu）と異なっていた[22)]。

つまり、アフロ・ブラジリアン宗教は、こうしたアフリカ各地のさまざまな宗教的伝統が、時代的・地域的にも大きく異なる多様な環境下で接触して生み出された、きわめてシンクレティックな宗教であるが、既述のように現在その系譜を辿ることは困難である。ここでは、アフリカの伝統を

より忠実かつ純粋な形で存続させてきたといわれるスーダン系ヨルバ族の「カンドンブレ・ナゴ・モデル」を事例に、その主要な神霊について概説する。

宇宙を創った至高神のオロルン（Olórum）は、最高神オリシャラを創造して大地をつくらせた。オリシャ（Orixá）はオリシャラの分身として生まれ、身近な自然界や自然現象を支配して、出産、疾病、農業、漁業、狩猟、戦争といったさまざまな人間活動に深い影響を及ぼす神霊である。ナイジェリアのヨルバ族の宗教では、400 以上のオリシャと先祖霊エグングン（Egungun）がパンテオン（pantheon, 神霊界）を形成しているといわれ[23)]、ブラジルにも多くのオリシャが伝来した。

カンドンブレの神界は、至高神オロルンを頂点として、その下に居並ぶ多数のオリシャ（神霊）ならびにエシュ（Exú）やエレ（Erê）と呼ばれる神格から構成されている。至高神は人間に憑依しないが、神話に裏付けられて神格化・人格化されたオリシャは、特定の自然界や自然現象と結びつき、儀礼を通じて特定の信者に憑依する。各オリシャには、イエス・キリストや聖母マリア、カトリックの聖人たちがそれぞれ習合しており、その対応関係は同一地域内ではほぼ一定である。

表 2 は、カンドンブレで祀られる主要なオリシャとエシュについて、それぞれの神格・支配圏・能力、カトリックとの習合（神や聖人とのシンクレティズム）、神霊を特徴付ける要素（elemento）、聖色、聖日をまとめたものである。また表 3 は、これらオリシャやエシュの呪物（fetiche）・シンボル（simbolismo）、食物（comida）、供犠（sacrifício）、祭日をまとめたものである。さらに、図版 1 は代表的なオリシャとエシュの風采・衣裳（indumentária）、図版 2 は代表的な呪物・シンボルのいくつかをまとめたものである。

オシャラ（Oxalá）は偉大なるオリシャの父で、宇宙を支配する最高神である。また、イエマンジャ（Yemanjá）は偉大なるオリシャの母で、海

表２　カンドンブレ・シャンゴで祀られるおもな神霊とその特徴（その１）

神霊名	神格・支配圏・能力	カトリックとの習合	要素	聖色	聖日
オシャラ (Oxalá)	偉大なるオリシャの父で最高神．宇宙を支配する．高貴・寛大で，善良・平和・安寧を具現化する．	イエス・キリスト ノッソ・セニョール・ド・ボンフィン（バイア州）	空気	白	金曜
イエマンジャ (Yemanjá)	偉大なるオリシャの母で最高位の女神．海を支配．優しく寛大で，妊娠・出産や漁夫の神．家族の調和や繁栄を具現化する．	聖母マリア	海水	空色	土曜
シャンゴ (Xangô)	稲妻，雷鳴，嵐の神．正義を司る強い指導者．男らしさの象徴．尊大で自惚れが強く怒り易い．イアンサン，オシュン，オバの３人の妻をもつ．	聖ヒエロニムス（バイア州） 聖ミカエル（リオデジャネイロ州）	大地（石）	赤 赤と白	水曜
オグン (Ogum)	鉄，農業，狩猟，戦争の神．鉄の道具を使う全ての職業の神．鍛冶屋の守護神．剣，槍，盾をもち，愛と正義のために戦う純潔の力強い男神．	聖アントニウス（バイア州） 聖ゲオルギウス（リオデジャネイロ州）	金属（鉄）	赤と黒 紺青色	火曜
イアンサン (Iansã)	戦争，風，嵐，稲妻の神．ニジェール川の女神．情熱的で不正を許さぬ厳格さ・純粋さを備える．死者の霊魂を恐れない．情熱的で，たえず邪悪や不正と戦う準備をしている．シャンゴの第一夫人．	聖バルバラ	空気（風）	赤 赤と白 バラ色	水曜
オシュン (Oxum)	川・湖の神．美しさや富（金），妊娠や出産を司る．新生児の守護神．同時に性愛や媚態，嫉妬を司る気まぐれ，移り気，狡猾な神．「オシュン母さん」の愛称をもつ母性豊かな女神．シャンゴの第二夫人．	カンデイアスの聖母（バイア州） 無原罪の御宿りの聖母（リオデジャネイロ州）	淡水	明るい黄	土曜
オバ (Oba)	川の女神．オシュンが平穏・静寂な川の神であるのに対し，オバは波立つ川の神．情熱的・男性的で非寛容だが勇敢で公平．シャンゴの第三夫人．	聖ジャンヌダルク	淡水	赤と白	水曜

ナナン (Nanã)	世界のあらゆる水の神．ジェジェ族に起源をもつ．ヨルバのパンテオンの神々の中で最年長の女神．親愛を込め「お婆ちゃん」と呼称される．	聖アンナ	水 大地 (泥)	白と青	火曜
オショッシ (Oxóssi)	森，野獣，狩人の守護神．カボクロの長と同一視．エシュと仲良し．	聖ゲオルギウス（バイア州） 聖セバスチャン（リオデジャネイロ州）	空気	緑 明るい青	木曜
オサイン (Ossain)	植物を司る森林の神．あらゆる薬用・礼拝用の植物を知り尽くす健康の守護神．	聖ベネディクト	空気	赤と青	月曜
オモル (Omolu)	天然痘，ペスト，病気の神．貧者の医者とされ，薬草などの深い知識で病を癒すが，怒ると死病を撒き散らす．若者の姿はオバルアエと呼ばれる．	聖ラザロ 聖ロケ	大地	黒と白 赤と黒	月曜
エシュ (Exú)	善と悪の両義性をもつトリックスター．人間と神を繋ぐメッセンジャー．しばしば一貫性を欠き，時に混乱・不和を招く悪戯者だが時に秩序の守護者．	サタン (悪魔)	火	赤と黒	月曜

（FUNDAJ 博物館の展示資料などをもとに筆者作成）

を支配する最高位の女神である。多くのオリシャは、オシャラやイエマンジャから生まれた。最高位のオシャラは、善意に満ちて神霊を統御し、世界に平和と安寧をもたらす。聖色は白、聖日は金曜日で、カトリックにおけるイエス・キリストと習合する。アパショロ（Apaxorô）と呼ばれる 3 枚の王冠のような円盤と先端に鳩が付いたアルミニウムやプラチナ製の杖を持ち、供犠は牝ヤギ、雌鶏、白鳩である。また、優しく寛大なイエマンジャは、家族の調和や繁栄を具現化するオリシャで、妊娠や出産、漁夫の神とされている。聖色は空色（白と青）、聖日は土曜日で、カトリックにおける聖母マリアと習合している。海の石や貝殻、月と星のアベベ（Abe-Bé）が呪物・シンボルで、供犠は雌鶏や去勢ヒツジなどである。

シャンゴ（Xangô）とオグン（Ogum）は、ともに力強い男神である。

表３　カンドンブレ・シャンゴで祀られるおもな神霊とその特徴（その２）

神霊名	呪物・シンボル	食物	供犠	祭日
オシャラ (Oxalá)	アパショロ アドゥジャ (Adjá) [1]	白トウモロコシ，米 ハチミツ	牝ヤギ，雌鶏 白鳩	1 月 1 日
イエマンジャ (Yemanjá)	海の石や貝殻 月と星のアベベ	アバドン [2]	雌鶏，アヒル ホロホロチョウ 去勢ヒツジ	12 月 8 日
シャンゴ (Xangô)	稲妻の石（Itá，Otá） オシェ	アマラ [3]	雄鶏，牡ヒツジ 亀	6 月 24 日
オグン (Ogum)	鉄の小さな農具の束 貝殻で飾られた箒	焼きヤムイモ アカラジェ [4] 黒フェジョン豆	牡ヤギ，雄鶏 ホロホロチョウ 豚，アルマジロ	4 月 23 日
イアンサン (Iansã)	剣，隕石 イルエシン	アカラジェ アマラ	牝ヤギ，雌鶏	12 月 4 日 (10 月 4 日)
オシュン (Oxum)	アベベ 金色の腕輪	オモロクン [5] シンシンデガリーニャ [6]	牝ヤギ，雌鶏 カモ	2 月 2 日 (7 月 16 日)
オバ (Oba)	盾，剣 銅製の冠 腕輪	アカラジェ ファロファ [7] ササゲ	牝ヤギ 雌鶏 カモ	5 月 30 日
ナナン (Nanã)	エビリ 腕輪	アンデレ	牝ヤギ，雌鶏	7 月 26 日
オショッシ (Oxóssi)	鉄，青銅 白い金属製の弓と矢 牛の角	黒フェジョン豆 ヤムイモ ササゲ アショショ [8]	牡ヤギ，雄鶏 豚 ホロホロチョウ	6 月 7 日
オサイン (Ossain)	７本の鉄の棒からなる道具で，中央棒の先端には鳩	ファロファ 黒フェジョン豆 蜂蜜	牡ヤギ，雄鶏	7 月 11 日
オモル (Omolu)	鉄製の矢と鉤 シャシャラ	トウモロコシ アベレン [9] アバドン，塩なしポップコーン	牡ヤギ 雄鶏 豚	8 月 16 日 (1 月 20 日)
エシュ (Exú)	三つ叉の矛	ポップコーン ファロファ	牡ヤギ 雄鶏	—

注：祭日はバイア州の場合．下段の括弧はペルナンブコ州の場合．

1）神霊を呼ぶ鐘．

2）デンデ油と白トウモロコシの料理（Abadõ）．

3）オリーブ油やデンデ油で調理したオクラなどのごった煮（Amalá）．

4）インゲン豆の粉を練ってヤシ油で揚げたもの（Acarajé）．

5）ササゲ，タマネギ，エビの料理（Omôlocum）．

6）鶏肉，タマネギ，ニンニクなどを煮込んだシチュー（Xinxim de galinha）．

7）キャッサバ粉を油で煎ったもので，時に卵や肉を入れる（Farofa）．

8）煮たササゲ，干し肉，タマネギ，トマトなどのサラダ（Axoxó）．

9）バナナの葉に包んで作ったトウモロコシのケーキ（Aberém）．

（FUNDAJ 博物館の展示資料などをもとに筆者作成）

1

2　3

4　5

6

7　8

9

図版１　代表的なオリシャとエシュの風采・衣裳
１．オシャラ
２．イエマンジャ
３．オシュン
４．イアンサン
５．シャンゴ
６．オモル
７．オショッシ
８．オグン
９．エシュ

（FUNDAJ・アフロブラジル博物館所蔵）

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

図版２　代表的な呪物・シンボル
１．アパショロ　２．アドゥジャ　３．月と星のアベベ　４．オシェ
５．オシュンのアベベ　６．イルエシン　７．弓と矢　８．エビリ
９．シャシャラ　10．７本の鉄棒の道具　11．三つ叉の矛
（FUNDAJ・アフロブラジル博物館所蔵）

雷神のシャンゴは正義を司る強い指導者で、イアンサン、オシュン、オバを妻にもつ。聖色は赤（赤と白）、聖日は水曜日で、カトリックにおける聖ヒエロニムスや聖ミカエルと習合する。オシェ（Oché）と呼ばれる二刃の石斧をもち、供犠は雄鶏、牡ヒツジ、亀である。また、軍神のオグンは剣や槍、盾をもち、愛と正義のために戦う純潔の男神で、農業、狩猟、鍛冶屋、戦争など鉄の道具を使うすべての職業の神である。聖色は赤と黒または紺青色、聖日は火曜日で、カトリックにおける聖アントニウスや聖ゲオルギウスと習合する。鉄製の小さな農具の束や貝殻で飾られた箒がシンボルで、供犠は牡ヤギ、雄鶏、ホロホロチョウなどである。

イアンサン（Iansã）、オシュン（Oxum）、オバ（Oba）は、いずれも雷神シャンゴの妻で、それぞれ個性的な女神である。第一夫人のイアンサンは、アフリカではニジェール川のオリシャで、戦争、風、嵐、稲妻の神である。非常に情熱的で美しい女神で、邪悪や不正を断固許さぬ厳格さと純粋さを兼ね備えている。右手には剣を携え、邪悪や不正と戦う準備ができている。聖色は赤（赤と白、バラ色）、聖日は水曜日で、カトリックにおける聖バルバラと習合する。イルエシン（Iruexim）と呼ばれる骨や木、金属製の柄に、馬の尻尾の毛を結び束ねた鞭をもつ。供犠は牝ヤギ、雌鶏である。

一方、第二夫人のオシュンは、川や湖などの淡水の神である。「オシュン母さん（Mamãe Oxum）」の愛称で呼ばれる母性豊かな女神である。美しさや富、妊娠や出産を司り、新生児の守護神である。その一方で、性愛、媚態、嫉妬を司り、気まぐれ、移り気、狡猾な女神でもある。聖色は明るい黄色、聖日は土曜日で、カトリックにおけるカンデイアスの聖母や無原罪の御宿りの聖母と習合する。黄金のアベベを持ち、供犠は牝ヤギ、雌鶏、カモである。

オシュンと対照的なのが、第三夫人のオバである。オバも川の女神であるが、オシュンが平穏・静寂な川の神であるのに対して、オバは波立つ川

の神である。性格は情熱的、男性的で、非寛容だが勇敢・公平である。聖色は赤と白、聖日は水曜日で、カトリックにおける聖ジャンヌダルクと習合する。盾や剣を携え、供犠は牝ヤギ、雌鶏、カモである。

ナナン（Nanã）は、ジェジェ族に起源をもつオリシャといわれ、アフロ・ブラジリアン宗教の神々の中で最年長の老婆であることから、「お婆ちゃん（Vovó）」の愛称で呼ばれている。世界のあらゆる水を司る女神である。聖色は白と青、聖日は火曜日で、カトリックにおける聖アンナ（聖母マリアの母）と習合している。エビリ（Ebirí）と呼ばれるヤシの葉で作った箒状あるいは飾り付きの輪状の道具を携え、供犠は牝ヤギ、雌鶏である。

水を司る女神が多い中で、オショッシ（Oxóssi）とオサイン（Ossain）は森林を司る男神である。オショッシは森、野獣、狩人の守護神で、カボクロの長と同一視される。聖色は緑（明るい青）、聖日は木曜日で、カトリックにおける聖ゲオルギウスや聖セバスチャンと習合する。白い金属製の弓と矢をもち、供犠は牡ヤギ、雄鶏、豚、ホロホロチョウである。また、オサインはあらゆる薬草や礼拝用の植物を知り尽くした、植物と健康を司る森林の守護神である。聖色は赤と青、聖日は月曜日で、カトリックにおける聖ベネディクトと習合する。呪物・シンボルは7本の鉄の棒からなる道具で、中央にある棒の先端に鳩がついている。供犠は牡ヤギ、雄鶏である。

オリシャの中でひときわ風采がかわっているのがオモル（Omolu）である。アフリカの天然痘の神シャンパナン（Xampanã）が、ブラジルではオモル（あるいは若者の姿ではオバルアエ Obaluaê）として祀られている。オモルは天然痘、ペスト、病気を司る神である。貧者の医者とされ、人智の及ばぬ深い知識と知恵によりあらゆる病を癒す力をもつ。その一方で、疑い深く、怒ると死病を撒き散らすと恐れられている。頭からすっぽりと長いロープ状の藁の上着をまとい顔を隠している。聖色は黒と白（赤

と黒)、聖日は月曜日で、カトリックにおける聖ラザロや聖ロケと習合する。シャシャラ（Xaxará）と呼ばれる貝殻などで飾られた藁の束をもち、供犠は牡ヤギ、雄鶏、豚である。

エシュは、ヨルバ族の神界において神々と人間とを繋ぐメッセンジャー（仲介者・媒介者）としてひときわ重要な神格をもつ。そのため、他のオリシャと異なりすべての人々からの信仰を受け、至上神オロルンに次ぐ力をもつともいわれる。しかし、その行動はしばしば一貫性を欠き、世界に混乱、不和、争いの種をばら撒いて秩序を乱すトリックスター（trickster）的神格として認識される一方で、既成秩序の問題点を暴きだし新しい社会を構築する秩序の守護神ともみなされる。

このような善と悪の極端な両義的性格や、攻撃的で抜け目のないマランドロ（malandro、ずる賢い人）的性格がエシュの大きな特徴といえる。その風采も、時に偉丈夫だが時に小人、時に美男だが時に醜男といった具合である。そのため、人々はエシュを崇めつつ同時に恐れる。聖色は赤と黒、聖日は月曜日で、カトリシズムの影響でサタン（悪魔）と習合する。しかし、伝統的なアフロ・ブラジリアン・カルトではエシュと悪魔の同一性を強く否定し、本来のメッセンジャー的神格を肯定する。三つ叉の矛をもち、供犠は牡ヤギ（黒色を好む)、雄鶏である。

Ⅳ　シンクレティクな宗教世界
――「伝統的」アフロ・ブラジリアン宗教の変容――

1　ペルナンブコ州レシフェのアフロ・ブラジリアン宗教

バイア州のサルバドールとならび、ペルナンブコ州のレシフェも大西洋奴隷貿易の拠点として、アフリカやブラジル各地から多数の黒人奴隷を「輸入」し、サトウキビプランテーションの労働力として売買した。そのため、アフリカ各地の宗教的伝統がカトリシズムの影響下で再編された、シャンゴ（Xangô）と呼ばれるアフロ・ブラジリアン宗教が都市部を中心

に成立・発展してきた。カンドンブレやシャンゴの名称は、黒人ではなく白人が与えたもので、両者はまったく同じではないが、その差は小さいといわれる（Bastide1960：191）[24]。シャンゴの宗教的モデルは、スーダン系ヨルバ族（ナゴ族）の宗教的伝統に忠実で、バイア州のカンドンブレとよく似た「伝統的」アフロ・ブラジリアン宗教の一つとして認識されている。

しかし、長くレシフェで調査を続けてきた宗教人類学者の Motta（1977, 1991, 1999）[25] によれば、シャンゴはペルナンブコ州におけるアフロ・ブラジリアン・カルトの 1 つに過ぎず、実際にレシフェでは、1）シャンゴ（Xangô）、2）ジュレーマ（Jurema）またはカチンボ（Catimbó）、3）ウンバンダ・ブランカ（Umbanda Branca, 白いウンバンダの意味）、4）ウンバンダ化されたシャンゴ（Xangô Umbandizado）、の 4 つのアフロ・ブラジリアン・カルトが認められるという。

1）のシャンゴは、アフリカ起源のパンテオンや儀礼などを忠実に守ろうとする、いわばバイア州のカンドンブレに相当する「伝統的」「正統的」シャンゴ（próprio Xangô）である。また、2）のジュレーマやカチンボは、ポルトガルに起源をもつメストレ（mestres）やインディオなどに起源をもつカボクロ（caboclos）と呼ばれる呪医霊（espíritos curadores）を崇拝するカルトで、概ねバイア州のカンドンブレ・デ・カボクロに相当する。3）のウンバンダ・ブランカは、ブラジルでもっとも影響力がある神霊術のカルデシズムとアフロ・ブラジリアン・カルトをおもな母体として形成された、原初的タイプの「純粋なウンバンダ（Umbanda pura）」である。さらに 4）のウンバンダ化されたシャンゴは、パンテオンや儀礼などにインディオやカルデシズムの影響が認められ、その名称が示す通りシャンゴの枠内に留まりつつも「シャンゴ・モデル」とは異なるウンバンダへの接近が確認できるカルトである。

レシフェのカルト・グループを調査した Motta（1977）の推定では、

シャンゴが全体の15%、ジュレーマが60%、ウンバンダ化されたシャンゴが20%で、ウンバンダ・ブランカは5%以下だという[26)]。そのうえで、より「伝統的」「正統的」なカルトから、より「人為的」「自然発生的」なカルトまで、さまざまなグラデーションのもとに存在するアフロ・ブラジリアン・カルトの多様性こそが真実の姿であり、それはレシフェという社会との関係においてのみ理解が可能だという（Motta, 1975；Maciel, 2007）[27)]。

そこで次節では、筆者がペルナンブコ州レシフェのジョアキンナブコ社会科学研究所に客員研究員として勤務していた1991年に調査機会を得た、市街地近郊カザ・アマレーラ地区にある、とあるテヘイロ（terreiro, 儀礼が行われるカルトハウスでペジ peji とも呼ばれる）での宗教実践について報告する。すでに調査から長い年月が経過しており、現状はまた異なると考えられるが、シャンゴのウンバンダ化がすでに当時から現れていたことを確認できる好例といえる。

2　アフロ・ブラジリアン・カルトの宗教実践の事例

1.　テヘイロの構造と祭壇の神像

ここに紹介するテヘイロは、比較的低所得者層が集住する住宅地の一角にある、カルト・リーダーの居住地内に建てられた間口が狭く奥行きの長い家屋である。入口を入るとすぐに儀礼フロアーが広がる。そこはテヘイロ内でもっとも重要な祭祀空間で、正面にはオリシャと習合するカトリックの聖人像などが並べられた簡素な祭壇が設けられており、その上の壁にはカルト・リーダーの守護神であるイエマンジャの額絵が飾られている。祭壇横（正面右側）の部屋の角には、楽団が儀礼に使う太鼓（タンボール tambor とかアタバケ atabaque と呼ばれる）やマラカ（maracá、ヒョウタン製のマラカス）といった楽器が置かれている。儀礼が始まると「ダンス空間」になるフロアーの中央部を取り囲むように、部屋の周囲にはベンチ

がいくつか置かれている。また、入口側の部屋の奥には、コンクリート製の低い壁で儀礼フロアーと分離された一般信者の専用席が設けられている。儀礼フロアーの天井には、イエマンジャの聖色を示す空色や白の紐がたくさん吊り下げられている。

儀礼フロアーに隣接して、さらにその奥には祭祀堂と呼べるような小さな部屋が左右に 2 つ並んでいる。儀礼フロアー正面の壁面には、左端と中央に戸口があり、そこからそれぞれの祭祀堂に出入りができる。祭祀堂は左側より右側の部屋の方がやや大きい。壁面中央の戸口より右側の祭祀堂に入ると、そこには部屋を取り囲むように白いテーブルクロスが掛けられた祭壇が並び、オリシャと習合するカトリックの聖像、オリシャの呪物やシンボル、供犠の骨を載せた皿、果物や飲み物などの供え物が所狭しと並べられている。

まず目に付くのは、祭祀堂の正面に設けられた祭壇のほぼ中央に、このテヘイロの守護神である海の女神イエマンジャと習合するカトリックの聖母マリア像が何体も置かれており、その前にはイエマンジャの呪物・シンボルである月と星のアベベや、供犠となった動物の骨が供えられている光景である。また、聖母マリア像の左隣には、稲妻や嵐の男神シャンゴと習合するカトリックの聖ヒエロニムス像が置かれ、その前にはシャンゴの呪物・シンボルであるオシェ（二刃の石斧）と供犠の骨が供えられている(写真 1)。さらに、聖母マリア像の右隣には、森や狩人の守護神オショシと習合する聖セバスチャンの像が置かれ、祭壇下のテーブルクロスの前には、オショッシの呪物・シンボルである鉄製の弓と矢が土焼きの鉢に納められている。

祭祀堂の左手にある祭壇に目を転じると、そこには最高神オシャラと習合するカトリックのイエス・キリスト像と、今なおノルデステの民衆から絶対的な信仰心を集めるシセロ神父[28] の像が置かれている。また、反対側の祭祀堂右手の祭壇には、鉄・農業・狩猟・戦争を司る純潔の男神オグ

写真１　祭祀堂の祭壇上に居並ぶオリシャと習合するカトリックの聖像や呪物、供犠（1991 年筆者撮影）

ンと習合するカトリックの聖ゲオルギウス像が置かれ、祭壇下のテーブルクロスの前には、オグンの呪物・シンボルである鉄製の小さな農具の束が土焼きの鉢に納められている。このほかに、祭壇下のテーブルクロスの前には、貝殻やナイフを入れた皿、土焼きの壺、食器類、太鼓などが置かれている。

このように、右側にある少し大きな祭祀堂には、アフリカの伝統に由来する神格の高いオリシャの憑依霊と習合するカトリックの聖像が祭壇に居並び、儀礼の最中も戸口は開け放たれたまま儀礼フロアーとつながっている。「ダンス空間」より中央の戸口越しにこの祭祀堂を眺めると、祭壇中央の聖母マリア像とその上の壁に掛けられたイエス・キリスト像が目に飛び込む趣向となっている。

一方、同じ祭祀堂でも左側の部屋はその趣が大きく異なる。ここに祀られているのは、一般にカボクロ（caboclo）と呼ばれるブラジル生まれの

憑依霊の像や、外国生まれの神像など多彩である。全体的に部屋は薄暗くて小さい。戸口を開けると、正面の祭壇中央に十字架が置かれ、その上の壁には長さ数メートルはある巨大なヘビの皮が掛けられていることにまず驚く。正面に置かれた祭壇の左右の端には、幼児の人形がいくつか置かれている。これは「クリアンサ（criança、子どもの意味）」と呼ばれる幼児霊を象徴する像と考えられる。無邪気な幼児ゆえに儀礼で果たす役割は相対的に小さいが、人種・民族的なアイデンティティを持たないため、混淆するブラジルを象徴するブラジル生まれの憑依霊と捉えられている。また、ここにもシセロ神父の像が置かれている。

次に祭祀堂の右手にある祭壇に目を転じると、豊富な白い顎髭をたくわえた白髪の黒人老人、「プレット・ヴェーリョ（Preto Velho）」[29] の像がある（写真 2）。この憑依霊は、ブラジルで奴隷として過酷な人生を過ごしたアフリカ人（黒人老人）の死霊とされ、手にはタバコのパイプや杖をもっている。像の横には儀礼で使われる 3 色の縞模様の長い杖が置かれ、火酒が供えられ、像の上には麦わら帽子が掛けられている。「プレット・ヴェーリョ」は、過酷な奴隷人生により陶冶された寛容で慈しみ深く物静かな老人とされ、人々の悩みに耳を傾け豊かな呪術的知識で救済を行う善行の神霊である。

写真２　手に杖やパイプを持ったプレット・ヴェーリョ像（手前）とクリアンサ像（奥）（1991 年筆者撮影）

一方、祭礼堂の左手にある祭壇

に目を転じると、ブラジルの黒い聖母「ノッサ・セニョーラ・アパレッシーダ（Nossa Senhora Aparecida）」像が置かれている。また、信者たちにはブッダと呼ばれていたが、見るからに七福神の一柱である太鼓腹の布袋（ほてい）様らしき座像があり、像の周りには貨幣が並べられている。東洋の宗教までも混在させるこのカルトの自律性や独立性を感じさせる。さらに、内開き戸のちょうど陰になる部屋の左隅には、エシュを祀る専用の一角が設けられている。そこには、頭に角をもち手に三つ叉の矛を携えた怖い形相のエシュ像が立ち、その前には供え物を入れる土焼きの鉢やコップが置かれ、ローソクの火が灯されている。また、こちらの祭祀堂の壁には、アルミ製の鍋、ノルデステの牧童がかぶる革の帽子（chapéu de couro）、麦わら帽子、ヤギなどの家畜に付ける首鈴（chocalho）など、人々の生活用具などが壁に掛けられている。

このように、伝統的な「カンドンブレ・ナゴ・モデル」を象徴する憑依霊と習合する聖像を祀る祭祀堂（右側）とは別に、伝統の逸脱と見なされて排除されてきた「カンドンブレ・ナゴ・モデル」には存在しないブラジル生まれの憑依霊などを祀る祭祀堂（左側）が存在することは、このアフロ・ブラジリアン・カルトがすでにアフリカの伝統から逸脱して、よりシンクレティックでブラジル的な宗教実践を自律的・独立的に執り行っていることの証左としてきわめて興味深い。

2. 組織と儀礼

儀礼はこのテヘイロを運営するカルト・グループが執り行う。その構成は、自ら特定のオリシャの憑依を受ける「ミディアム（médium、霊媒）」と呼ばれる信者と、憑依を受けない一般信者に大別される。一般に「ミディアム」になるためには、神格側の要望で顕現する何らかのしるしの公認とイニシエーションの完遂が必要とされる。「ミディアム」は、その責務を通じて自身の守護神との確たる関係を構築してその加護を受ける。一

方、神格に選ばれなかった一般信者は、「ミディアム」を通じて自身の帰依心を表明し、その加護と援助を享受する[30]。「ミディアム」は圧倒的に女性が多く、男性はわずかである。

カルト・グループを統率するのは、カルトハウスの所有者で自身も「ミディアム」であるカルト・リーダー（女性なら聖なる母 Mãe de Santo, 男性なら聖なる父 Pai de Santo と呼ばれる）で、その下に聖なる娘（Filha de Santo）あるいは聖なる息子（Filho de Santo）と呼ばれる「ミディアム」が何人かいて、儀礼の中心的な役割を果たす。ここのカルト・リーダーは、イエマンジャの憑依を受ける 64 歳の女性「ミディアム」で（写真 3)、ほかに男性 2 ～ 3 人を含む全体で 10 人ほどの「ミディアム」が集まっている。彼らは基本的に白装束で白のかぶり物をしている[31]。また「ダンス空間」を取り囲むように、一般信者が数十人ほど儀礼フロアーに待機している。

写真３　イエマンジャが守護神のカルト・リーダー（1991 年筆者撮影）

カルトハウスに信者らが三々五々集まる中、儀礼は夜 8 時頃に始まった。儀礼の内容はもっぱら歌と踊りである。最初に男性が儀礼開始の歌を始める。彼の歌いを「ミディアム」や一般信者らが復唱しながら、太鼓やマラカスのリズムに合わせて反時計回りに列をなし、前後後退を繰り返しながら踊りだす。儀礼の最初は、歌と捧げものによるエシュへの祈りから始まる。「ダンス空間」の中央に

は金属製のコップが置かれ、その傍らにローソクが灯されて、火酒（カッサーシャ）が床に撒かれる。準備が整うと、太鼓の合図とともに信者たちがリーダーの歌を復唱しながら、手拍子とともに反時計回りに歌い踊る。通常、儀礼の最初に行われるエシュへの祈りは、オリシャの降臨を仰ぐために、神々と人間との間の仲介者・メッセンジャーであるエシュに、オリシャを呼びにやるという本源的な意味がある。しかし、同時にエシュの反道徳的で破壊的な所業により儀礼が台無しにならないように、予め最初に供応して怒りをなだめ追い払っておくという意味合いもあるといわれる。信者たちは歌い踊り、祈りを捧げてエシュをもてなす。そして、最後に「エシュは（火酒を）飲み、仕事を終えて帰った」と繰り返し歌い、約 23 分間におよぶエシュに対する冒頭の儀礼が幕を閉じる。歌に送られながら、金属製のコップとローソクがエシュの像が祀られた左側の祭祀堂に戻される。

続いて、その曜日のオリシャに対する儀礼が始まる。この日は鉄を司る男神オグンの儀礼日である。信者たちは最初に床にひざまずき、左手を額にあてて祈りを捧げ、それからふたたびリーダーの歌を復唱しながら踊り回る。数分後、開始より約 28 分が経過した頃、突然列の中で踊っていた一人の女性の顔つきが変わり、体のバランスを崩しながら列から離れる。そして、踊りの輪の中央でぐるぐる旋回しながら、白い頭巾をとり払い、長い髪の毛を振り乱して激しく踊る。彼女は時に「アー、アー」と奇声を発しており、他の「ミディアム」らと抱き合って挨拶をする。

こうして、その後も太鼓とマラカスの伴奏に合わせて、つぎつぎと儀礼歌が入れ替わりながら、オシャラやオシュンといった神々やブラジル生まれの「プレット・ヴェーリョ」など、さまざまな神霊への祈りや歌、踊りが間断なく続けられる。その間に何人もの「ミディアム」に憑依が起こり、そのたびに各精霊が前に進み出て登場を宣言し、個性豊かな踊りや振る舞いを演じる。

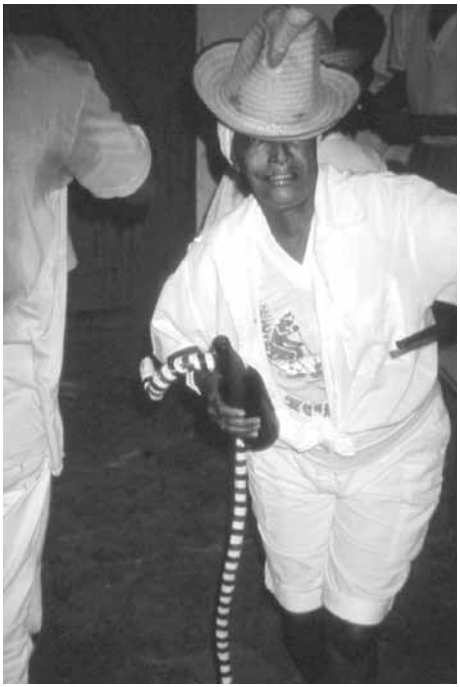

写真４　麦わら帽子をかぶり、右手に杖と火酒、左手にパイプを持って踊る「ミディアム」（1991 年筆者撮影）

開始より約 1 時間を過ぎた頃から、歌と踊りは熱気を帯び、憑依がつぎつぎと起こる。ある女性は麦わら帽子をかぶり、大きく腰を曲げて頭を下げ、左手の拳は腰に置き、足を激しく前後に動かしながらその場で踊っている。同様の踊りを見せる「ミディアム」は何人も見られる。「プレット・ヴェーリョ」の降臨と思われる。ある女性は左手に火酒の瓶と長い杖をもち（写真 4)、またある男性はタバコのパイプを持って踊っている。中には苦しそうな表情で激しく痙攣を起こし、男性に抱きかかえられる者もある。開始より 1 時間半が過ぎる頃には、立ちこめるパイプタバコの煙、酒の臭い、「ミディアム」の発する頓狂な精霊の話し声や叫び声、太鼓やマラカスが奏でる激しいリズムと踊りで、儀礼フロアーはどんちゃん騒ぎの様相を呈する。オリシャが降臨する最初の頃の厳かな儀礼とは打って変わり、信者がこぞって歌い、個性豊かに踊り、肩を抱き合い、タバコをふかし、酒を飲み交わして神々と交歓するといった雰囲気である。こうして儀礼は翌朝 4 時頃まで続いた。

3.　シャンゴのウンバンダ化

このカルト・グループの宗教実践にみられる神霊界や儀礼内容をみる

と、シャンゴの枠内に留まりつつも、伝統的な「カンドンブレ・ナゴ・モデル」とは明らかに異なるウンバンダへの接近が確認できる。すなわち、1）祭祀堂に祀られたさまざまな神格 (オリシャ) に対応するカトリックの聖人（聖母マリアやイエス・キリストを含む）像の祭祀、2）儀礼におけるオリシャの降臨と憑依（ウンバンダでは神格の高いオリシャは人間には憑依せず、より下位の憑依霊が名代となり憑依する)、3）オリシャの降臨を仰ぐための儀礼の冒頭におけるエシュへの祈りと供応、といった要素は、「カンドンブレ・ナゴ・モデル」を特徴づけるオリシャ崇拝とそのための儀礼システムと捉えることができる。さらに、4）ウンバンダでは禁じられている太鼓を使うこと、5）神霊への供犠・供物が認められること、6）歌と踊りの儀礼が長時間にわたり続き、憑依が起きるまでの時間も比較的長いこと、7)「ミディアム」が自身の守護神を特徴づける衣裳を持っていること、なども伝統的なシャンゴの枠内に留まっている証左と考えられる。

一方で、1)「カンドンブレ・ナゴ・モデル」の神霊界には存在しない「プレット・ヴェーリョ」や「クリアンサ」といった憑依霊（死霊）の像や、果てはブッダのような東洋の神像までが祭祀堂に祀られていること、2）儀礼においてブラジル生まれの憑依霊が降臨して重要な役割を演じること、3）インディオのシャーマニズムとの関係を想起させるマラカスを儀礼に用いることなどは、「伝統的」シャンゴからよりシンクレティックなウンバンダへの接近とみることもできる。しかし、それはシャンゴがウンバンダへ収斂されていくことを示唆するものではなく、今に生きる信者たちが「伝統的」シャンゴをより現実性のあるものに自律的に改変した一時の姿と捉える方が妥当であろう。いずれのモデルにも収斂されないさまざまなタイプのカルト・グループが独立的に生き生きと活動し、時代とともに自律的に変化するダイナミックな宗教の多様性こそが、アフロ・ブラジリアン・カルトの実態といえる。

V　おわりに

本研究で明らかになった諸点をまとめると、以下の様である。

アフロ・ブラジリアン宗教は、大西洋奴隷貿易がもたらした文化的産物といえる。すなわち、それは移動を強いられたアフリカのさまざまな民族と、移動を強いたヨーロッパの民族との多様な接触の中で生み出された、きわめてシンクレティックな宗教であり、時代的・場所的にも顕著な多様性を備えていたと考えられる。

しかし、アフロ・ブラジリアン宗教研究は、そのシンクレティックで多様な宗教実態に迫るというよりは、むしろアフリカの「伝統」をより忠実かつ純粋な形で残している一部のカルト（「カンドンブレ・ナゴ・モデル」）のみに正統性や優越性を付与し、シンクレティックなカルトは真正性を欠くカンドンブレの稚拙な模倣に過ぎないとみなされてきた。

ところが、1930年代以降、急速なナショナリズムの高揚の中で、混血性こそブラジルにおける国民国家形成の本質であるとみなされるようになった。このような社会の大きな変化の中で、ブラジルではウンバンダと呼ばれる新しいアフロ・ブラジリアン宗教が急成長をみせた。「ウンバンダ・モデル」では、「カンドンブレ・ナゴ・モデル」で中心的な役割を果たしていたオリシャやエシュが相対的に周縁化（脱アフリカ化）される一方で、その神霊界には存在しなかった「カボクロ」「プレット・ヴェーリョ」「クリアンサ」といったブラジル生まれの憑依霊が新たに加わり、儀礼において重要な役割を演じるようになった。

アフリカの「伝統」に特化せず、ブラジルの民族的背景をバランスよく象徴的に表現するウンバンダは、地域的にも信者数的にも多数派を占めるまでに急成長を遂げ、「カンドンブレ・ナゴ・モデル」の伝統を継ぐアフロ・ブラジリアン・カルトにもさまざまな影響を及ぼすようになった。本

稿で事例として考察したペルナンブコ州レシフェのカルト・グループの場合も、その神霊祭祀や儀礼内容にさまざまなウンバンダ的影響をみて取ることができた。いずれのモデルにも収斂されることなく、さまざまなタイプのカルト・グループが独立的に存在し、自律的に活動するダイナミックな多様性こそが、アフロ・ブラジリアン宗教の実態と考えられる。

【謝辞】本稿で取り上げたテヘイロでの調査に際して、Fundação Joaquim Nabuco 博物館の職員であった Francisco de Oliveira Gangorra 氏の協力を得た。彼の仲介がなければ本調査は不可能であった。心から感謝の意を表したい。

注

1) IBGE の宗教統計は、教会員キリスト教徒の数を都市や郡レベル、つまり各個別教会から直接集計しており、それぞれの教派本部の資料は用いていない。そのため、通常、福音派教会の 10–30％が集計漏れとなっているとの指摘もある（Barrett ed. 1986: 741）。また、実際には複数の宗教を信仰する人々が増えており、信者数は人口数を大きく上回っている。そのため、全人口に占める教派別信者数の内訳は、ブラジルの多様な宗教世界の実情を必ずしも正しく反映していない。
Barrett, D. B. ed. 1986.『世界キリスト教百科事典』（原著、*World Christian Encyclopedia*. Nairobi: Oxford Univercity Press, 1982）．教文館.

2) 近年の顕著な動向として、カトリック信者が減少する一方で、プロテスタント信者が急増している。IBGE によると、全人口に占めるローマ・カトリック信者の割合は、1960 年の 93.1％から 1991 年の 83.0％、2000 年の 73.6％へ減少した。一方で、全人口に占めるプロテスタント信者の割合は、1960 年の 4.0％から 1991 年の 9.0％、2000 年の 15.4％へ急増している。

3) 統計上、かつて両者はエスピリタ（espírita）として一括されていたが、1965 年以降、カルデシスタ部門とウンバンダ部門に分けられた。その後、さらに前者はアルト・エスピリティズモ、後者はバイショ・エスピリティズモと分類されるようになった。前掲 1）742p.

4) この名は彼の本名ではなく、彼の霊が彼に宿る前に宿っていたケルトの詩人の名だという（古谷 1985：69）。
古谷嘉章 1985．テヘイロ―ブラジルの憑依宗教.『季刊民族学』34：67-79.

5) バイショ・エスピリティズモには、ウンバンダ（ブラジル全域）やカンドンブレ（バイア州、リオデジャネイロ州、サンパウロ州）、マクンバ、キンバンダ、シャンゴ（ペルナンブコ州）、タンボール・デ・ミナ（マラニョン州）、バトゥーケ（パラ州）など、呼称の異なる多数の教派があるが、一般にカンドンブレとウンバンダがそれらの代表的呼称として用いられることが多い。古谷（1986）は、アフロ・ブラジリアン・カルト研究における 2 つのモデル、すなわち「カンドンブレ・ナゴ・モデル」「ウンバンダ・モデル」の研究史や儀礼システムを比較対照しつつ、その中での「カボクロ」と呼ばれるブラジル生まれの憑依霊カテゴリーの位置づけを検証することで、従前モデルの相対化を通じて、ブラジル宗教の多様性の現実を捕捉しようと試みている。
古谷嘉章 1986. 憑依霊としてのカボクロ―アフロ・ブラジリアン・カルト研究における二つのモデル―.『民族学研究』51(3)：248-274.

6） 前掲 1）741p.

7） 16–19 世紀にかけて進展した大規模な大西洋奴隷貿易や新大陸における黒人奴隷制は、すでに旧大陸で行われていたものが拡大したものにすぎない。
ジョナサン・アール著 古川哲史・朴珣英訳 2011.『地図でみるアフリカ系アメリカ人の歴史―大西洋奴隷貿易から 20 世紀まで―』明石書店. pp. 18-21.

8） 前掲 7）pp. 18-21.

9） 大貫良夫編 1984.『民族交錯のアメリカ大陸』山川出版社. pp. 342-343.

10）ブラジルに輸入されたアフリカ人奴隷の総数は、少なくも 300–400 万人に達すると推定されているが、その数は定かではない。バイア州サルバドール市のアフロ・ブラジル博物館の資料によると、ポルトガル人による植民の開始から 1851 年までに約 450 万 7940 人のアフリカ人が奴隷労働力としてブラジルに渡ったとある。

11）ブラジルの公的な奴隷輸入禁止は 1850 年、新大陸で最後まで維持された奴隷制の廃止は 1888 年であった。

12）ナイジェリアの中西部では、すでに 11–14 世紀にはハウサ人により、カノ、カチナ、ザリアなどの高度に発達したイスラム都市国家群が建設されていた。

13）現代の学者たちは、奴隷貿易の初期の頃には、奴隷船での死亡率が平均 25~40％に上ったと推測している。前掲 7）pp. 18-21.

14）バイア州サルバドール市にあるアフロ・ブラジル博物館の資料による。

15）同上。

16）同上。

17）アフロ・ブラジリアン・カルトの研究史については、古谷（1986、2003）に詳しい。
古谷嘉章 1986. は前掲 5）.
古谷嘉章 2003.『憑依と語り―アフロアマゾニアン宗教の憑依文化―』九州大学出版会.

18）ナゴとは、西アフリカのヨルバ出身の黒人奴隷に対するブラジルでの呼称である。

19）アフリカの諸民族がもたらした宗教の中でも、ヨルバ系はダホメイ系より、ダホメイ系はバントゥー系よりも優れているといった宗教発展段階の序列化や、カトリシズムの強制下におけるアフリカ系宗教の偽装的存続といった、隠れた支配関係がその背後にある。

20）Arakaki, U. 2009. トランスナショナル時代のウンバンダ.『国立民族学博物館調査報告』83：89-104.

21）古谷 1986. は前掲 5）pp. 270-271.
古谷は両モデルの中心地から遠く離れたパラ州ベレンのミナ・ナゴ・カルトを対象に、その中でクリオール霊であるカボクロがどのように位置づけられているかを詳細に分析した。そのうえで、「カンドンブレ・ナゴ・モデル」「ウンバンダ・モデル」

における「カボクロ解釈」を批判的に検証した。

22）藤田富雄 1982.『ラテンアメリカの宗教』大明堂. pp. 177-178.

23）同上。

24）Bastide, R. 1978. *The African Religions of Brazil*. Tr. by Helen Sebba. Baltimore: The Johns Hopkins University Press.

25）Motta, R. 1977. *Jurema*. Recife: Centro de Estudos Folclóricos da Fundação Joaquim Nabuco.

Motta, R. 1991. Edjé Balé. Tese de Concurso para Professor Titular no Dept. de Ciências Sociais do Centro de Filosofia e Ciências Humanas/UFPE. Recife.

Motta, R. 1999. Religiões Afro-Recifenses：Ensaio de Classificação. In *Faces da Tradição Afro-Brasileira,* orgs. C. Caroso e J. Bacelar, 17-35. Rio de Janerio: Pallas.

26）同上。

27）Motta, R. 1975. O Natal dos Cultos Africanos do Recife. In *Revista do Arquivo Público,* v.29, n°31, 21-25. Recife.

Maciel, S. M. 2007. A Sociabilidade Religiosa Afro-Brasileira no Bairro do IPSEP. Dissertação (Mestrada): Universidade Católica de Pernambuco.

28）本名はシセロ・ロマン・バチスタ（Cícero Romão Batista）。1844 年、セアラ州のクラトに生まれた。大干ばつにより人々が飢餓と貧困に喘いでいた 1889 年 3 月、「聖体のパンの奇蹟」により、神の使徒、預言者、救世主として崇められるようになった。聖ローマ宗教裁判所の異端裁定にもかかわらず、彼は民衆の絶大な支持と崇拝を受け、ノルデステの宗教指導者、そして政治家としても大いに活躍した。黒色の法衣、帽子、杖を身につけて立つシセロ神父の像が、今でもノルデステ民衆の家の中に祀られているのを見る。

29）プレット・ヴェーリョは、時に老婆などさまざまな姿で現れる。

30）前掲 4).

31）「ミディアム」は憑依を受ける守護霊を象徴する衣裳も持っている。